

編 集 後 記

本号は現段階における胃集検の一大集成号であるといえる。昭和45年秋の胃集検学会長春日井博士の巻頭言に始まり、この領域における元老、先達ともいえる黒川博士ほか9博士の御随想につづいて、胃集検の方法、成績と将来の展望に分けられ、それぞれ座談会をまじえて第一線の代表的研究者の報告がまさにくりひろげられているという内容で、読者諸兄姉は昔より現在まで、そして現在の胃集検の実態をほぼ把握されることと思う。

方法論としては、間接X線、テレビおよび内視鏡によるスクリーニングについて、それぞれ市川、村上、藤田の諸博士により、集検における精検については北川博士により、地域、職域および外来の集検の特殊性についてはそれぞれ北、中馬、淵上の諸博士によりあまねくすぐれた報告がよせられた。

成績としては、集検と外来の比較については山口、集検発見良性疾患の成績については西沢、地域および職域の逐年集検の成績についてはそれぞれ中村、若林により、疫学的面についてはそれぞれ愛川、栗田により、未来、展望としては高橋、二階堂の諸博士により、これまたあまねくすぐれた報告がよせられている。終りは公募より選ばれた10早期胃癌例の間接X線像で結ばれて興味をそえ、この種の特集号として誠にすぐれた一巻となったことは喜ばしいことであつた。

筆者は昭和46年度胃集検学会長として学会を盛会裏に終えた今、筆をとっているが、この総会では、新しい集検胃カメラPA型がとりあげられ、今後そのすぐれた成績が胃集検を大きく向上させるであろうと期待する。本号により、胃集検の今後の大きな進歩こそ人類を胃癌より救うための最も重要で必須な事項であることを再認識していただけたと信じあつたがきとしたい。

< 崎 田 隆 夫 >